



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

### 「われら高年期探検隊3 セックツ寺院」

わが輩の肉体は一つしかないのに、散策組と研究所組の二組に分かれることになった。  
(どうするんだよ。大魔王よ)

そんなとき常に助けてくれるのがわが探検隊のサル学の智者である。

散策組をバザールで解放し、買い物を堪能したところに智者がピック・アップに行き、われ等と合流するという方策であった。サル学については後述するとして、問題は簡単に解決した。これは「ラーマヤナ物語」を彷彿させる。困ったときには猿王ハヌマーンがラーマ王子を助ける物語である。

これで何とか研究所の好意に応えることができた。

散策組のすっきりした顔を見て一安心。さて次の目的地に向かうことにした。

最初はカールレー仏教石窟寺院である。

インドに行ったことがない人は「石窟寺院」といってもピンとこないであろう。ちなみに、わが輩はくセックツ>と発音しているつもりだが、ぼん子には「セックス寺院」と聞こえるらしい。

デカン高原の花崗岩の岩山をくり抜いて造営した寺院である。BC2世紀からの造営で、奥行38メートル、幅7メートルもある。

アーチ型の天井に取り付けられた同型の木材は、開鑿(かいさく)されたころのものだと言われている。

世界遺産アジャンタ石窟群に比べると小規模のものだが、わが輩のお気に入りの石窟寺院である。

わが輩は地元と同じように「カルラ」と呼ぶ。初めてこの石窟寺院を訪れたとき驚嘆した。そのころは訪れる人も少なかった。寺院の入口にはヒンドゥー教の祠堂があるが、それが大きくなり正面を狭くしている。

(けしからん!)

と、怒ったところでインドでは仕方のないことである。すべて信仰が優先なのである。祠堂の主神はエークビラー女神で、漁師カーストによって信仰されている。彼らはデカン高原の麓から歩いて巡礼にやって来る。どうやら近年に女神信仰がより盛んになったようであるが、1845年にはすでに祠堂はあった。その歴史はもっと古いのかもしれない。

(そんなに古いのなら文句もいえないね)

「ここに来たことがある」

誰かが言った。実はわれら探検隊の半分はかつて訪れていた。過去を忘れていたのである。われら高年期探検隊の脳みそは、記憶はあとから追いかけてくる。あとから追いかけてこないこともある。

そして、すべて記憶が消え去るときがわれらの昇天のときである。そうなるとも見ることも、聞くことも、話すこともできない。わが輩が存在したことを覚えている人も、十年後、二十年後にはいなくなる。すべては<無し>になる。

(なんと虚しいことよ。読者諸氏よ)

これはわれら凡人のレベルのことである。

聖なる人の崇高なる教えは残さなければならない、と先人は考えた。それには壊れやすい煉瓦造りのものではなく、石造りの強固なものでなければならない。それが石窟寺院なのである。すでに二千年以上存在し続けている。

(すごい!)

次にバージャー石窟寺院を訪れた。ここには珍しい石塔群(ストウーパ)がある。どういうわけか、数基の小ストウーパが一カ所に群立している。松茸が数本集まって生えてきたようなものである。

ブッダの六大弟子の供養の石塔なのか、岩山に余裕があったのでとりあえず掘っておこうと考えたのか、われら凡人には謎である。

凡人は思い出した。

やはり、われら探検隊の半分は仏教美術の学者と訪れていた。しかしながら思い出したのは、学者の<謎>の解説ではなく、あの事件のことである。

石塔の半円形の上部に穴があいている。木製の傘竿(さんかん)を差し込む穴である。大阪のおばちゃんの自転車のハンドルに傘を固定する商品「さすべえ」にあたる部分である。この穴の型で年代が測定できる。

この解説を聞いた某隊員が学者を煽った。

「上って確認するのが本物の学者だよ」

学者が上り、つづいて大先生が上ったが転げ落ちて骨折してしまった。某隊員はこの経緯を告白し反省したが、なぜか皆で笑った。

わが輩はそれを聞いて思った。

(天罰じゃ!)

人は思い出すと言っても、一から十まで浮かび上がってくるのではない。もっとも印象的なことが意識にのぼってくる。特に他人の不幸はそのうちの一つである。

もちろん、自分の不幸は思い出したくもない。

寄り道はこれぐらいにして、インダス文明古代遺跡にまっしぐら。もう時間がない。寄り道している場合ではないが、また寄り道してしまうのだろうか。